



今号の表紙を見て、お気づきになったでしょうか。そう、「牛」です。今号は、富山県立中央農業高校にご協力いただき、本誌初(?)の「牛との共演」となりました。33万㎡にもわたる広大な同校の敷地には、3つの牧場があり、その1つを撮影場所の第1候補にしました。ところが、他の候補場所での撮影を終えて、いざ牧場で撮影しようとした時には、牛ははるか遠くに。そこで、生徒たちの副担任で農業科の川口純平先生(写真)が牛の元へ向かい、餌をまきながら牛をちょうどよい位置に連れてきてくださいました。大好きな牛に囲まれると、それまで緊張気味だった生徒たちはリラックスモードに。その結果、笑顔が素敵な表紙の写真を撮影することができました。いまだ続くコロナ禍で油断のできない日々が続いていますが、今号の表紙が、先生方にとって癒しになればと思います。(渡邊)



VIEWnext
高校版は

電子ブックで閲覧可能です

『VIEW next』高校版、『VIEW21』高校版2020年4月号以降の記事は、電子ブックでご覧いただけます。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご確認ください。
HOME → 教育情報 → 高校向け → 情報誌最新号

<https://berd.benesse.jp>

VIEWnext

高校版 2022年4月号

4月15日発行
(予定)

『VIEW next』高校版は
年6回の発行です

先生方からのご意見を
紹介します

Reader's VIEW

2021年12月号へのご意見

地域連携の目的を「共有」していく

12月号の特集「地域連携のあり方を問う」は、なぜ地域連携を行うのかを改めて考えさせられる内容だった。学校・生徒と地域社会をつなぐために、我々教師がコーディネーターとして、前向きに地域連携に取り組みたいと思った。連携の目的を、教師・生徒・地域で「そろえる」のではなく、「共有する」ことが大切だと感じた。 東京都立葛飾総合高校 川島健太郎

現場で学ぶ経験こそ、生徒にとって有益

12月号の特集「地域連携のあり方を問う」で紹介された熊本県立熊本工業高校の記事を読み、将来社会に出る高校生にとって有益なのは、実際の現場から学ぶ中で、自分が役に立てたという経験をする事だと思った。また、「地域連携」を謳う学校は、学校教育の中に「地域を取り込む」のではなく、「地域の中に取り込んでもらえる」学校を目指して、謙虚に、丁寧に、そして率直な思いを伝えていくことで、地域と関係を結ぶことが必要だと改めて感じた。 和歌山県立橋本高校 寺田順子

過去の成功体験を手放し、目の前の生徒に向き合う

12月号の「未来を描く！創る！イノベティブな生徒たち」で紹介された静岡県・私立静岡聖光学院中学校・高校の高校ラグビー部監督である奥村祥平先生の、「自分の成功体験や価値観を手放すことも必要」という言葉に共感した。私自身、進路指導について同様のことを痛感している。自分の大学受験やこれまでの生徒への指導の経験は、今後の指導の基礎にはなるが、決して判断基準にはせず、目の前の生徒は今までの生徒とは全く異なるかもしれないという気持ちで、指導に臨むようにしている。

福岡県・私立大牟田高校 荒木信一

「情報」を軸に、学校の教育活動を展開する

デジタル時代において、教科「情報」の授業で身につける力は、総合的な探究の時間を始め、すべての教科の学びに生かすことができるという意味で、「情報」を学ぶメリットは大きい。コロナ禍によって浸透したオンライン授業や、GIGAスクール構想による1人1台端末など、教育のDX(デジタルトランスフォーメーション)の進展こそ、これからの教育の中心になるだろう。12月号の「新課程レポート」を読み、「情報」を軸に学校の教育活動を展開するという考えに共感した。

徳島県 匿名希望

教師も、「学ぶ」「働く」「暮らす」をバランスよく行う

12月号の「これからの進路指導のための世の中トレンド解説」では、「学ぶ」「働く」「暮らす」の視点で「心理的安全性」が取り上げられており、大変参考になった。私は、以前自治会長を務めた際、近所の人々との交流から多くを学び、「学ぶ」「暮らす」の必要性を実感したが、自分が住む地域とかかわりを持っている教師はどれくらいいるだろうか。教師が「学ぶ」「働く」「暮らす」のバランスをよくなり、真の心理的安全性を考える必要があると思った。

愛媛県立松山北高校 大谷修一